日本医学教育学会第37回大会：東京大学医学教育国際協力研究センター（2005年）[*1]

第37回日本医学教育学会大会実行委員会

2005年7月29，30日の2日間にわたり，東京大学医学教育国際協力研究センターの主管により第37回日本医学教育学会大会を，東京大学本郷キャンパスで開催した．

運営：本大会の指名が正式に決まったのは2年前だったか，本格的準備に入ったのはちょうど1年前に，高知大学が第36回大会を開催された後であった．第37回大会の特徴は，学内共同利用組織である東京大学医学教育国際協力研究センターがお引き受けしたことにあると思う．もちろん，廣川信隆医学部長と永井良三病院長には副大会長として参加していただき，その他多くの先生方にも運営委員として参加していただいたが，センターとしての知名度，実績なども学会に恥じないものにするべく，スタッフ全員が一団となって努力した．実際には大滝助教授を中心に事務補助員の方々すべてに担当を決め，それぞれが責任を持って準備運営に当たったことがよい結果に結びついたと思っている．なかでも，インターネットでの抄録受付などITの面で文字通り粉骨砕身の働きをしていただいた故若林正機関研究員と，ポスターの作成を一手に引き受けていただいた井上千鹿子さんには深甚の感謝の意を表したいと思う．裏方業務を引き受けていただいた㈱アクセスブレインの佐竹朋子さんにも感謝している．最後に東大病院ボランティアの皆様にクロークを担当していただき，大好評であった．

参加者：参加者は650名を越え，各会場とも活気のあふれる議論が展開された．特に，ワークショップでは会場から溢れんばかりの参加者のあるものもあり，喜ばしい限りであった．

大会長講演：“明治新政府はなぜドイツ医学を選んだか”

江戸時代になって長崎の出島のオランダ人の中に医師がおり，彼等から西洋医学を学んだ．

その中でシーボルトの影響は大きかった．弟子の3人はお玉ヶ池種痘所の設立者の中に加わった．実はシーボルトはオランダ人になりすましたドイツ人であった．

初めての解剖の翻訳書として知られている解体新書は，実はドイツのクルムスの解剖テキストをオランダ語に訳したものであった．このような例でわかるように，江戸時代に既にドイツ医学の影響があった．明治新政府の官僚で長崎でオランダ医学を学んだことのある相良知安が，ドイツ医学を選択する決断をした．彼は東大医学部の前身の東京医学校の校長にもなった．東大医学部はドイツから次々と教師を招き，ドイツ医学の教育が始まったところである．

特別講演：特別講演の講師には，オレゴン健康科学大学のGordon L. Noel教授とインディアナ大学のThomas S. Inui教授を米国からお招きした．Noel教授は外国人客員教授として2001年に，Inui教授は文部省特別招聘教授として2000年に当センターに滞在され，現在も客員研究員として継続的に御指導いただいている．

Noel教授は“Helping Medical Students to Become Outstanding Clinicians, Teachers, and Scientists—How can Japanese medical educators plan global educational goals and manage change?”というテーマで，先生の日本での教育経験や調査結果も交えながら，日本の医学教育の長所と短所を指摘し，今後の医学教育改革の方向性を示唆された．

Inui教授は“What the Todai Curriculum Con-

[*1] The 37th Congress of Japan Society for Medical Education (2005), International Research Center for Medical Education, the University of Tokyo

キーワード：日本医学教育学会

sultant Took Home: Academic Omiyage'' というテーマで，教授が先導役を務めた東京大学医学部の教育改革について振り返り，カリキュラム改革に共通する要点を紹介すると共に，その国や組織の文化に配慮することの重要性を述べられた．

教育講演：東京大学教養学部長・佐藤学教授による「専門家教育における専門家像とカリキュラムの再構築―医学教育への提言―」の司会を加我が担当した．

“大学院教育の目的は何か”という根源的な問いと“文系，理工系，医系の大学院教育の現在の動向とその分析”についての内容の濃いお話であった．他と比較すると医学系の大学院教育の現在の姿は旧態依然のままであることが知らしめられる耳の痛い講演であった．

医学教育というと，これまで卒前医学教育と研修医教育が活動の中心であったが，大学院教育は今後真剣に取り組むべき重要な課題である．

シンポジウム：第37回大会では，4つものシンポジウムが開かれた．「シンポジウム1．卒後研修：医師のキャリアデザイン」では，後期研修に関する議論が繰り広げられた．初期研修制度が開始されて1年余りが経過し，2年目の研修医たちは後期研修に大変不安を抱えており，時宜を得た内容となった．「シンポジウム2．初期研修後の進路選択―医学研究者への道―」では，基礎医学，臨床医学の研究に関する話題が出た．社会や行政側からも発言者が出たのが印象的であった．「シンポジウム3．医学教育研究の現状と展望」では，さまざまな取り組みが紹介され，医学教育学位コンソーシアムの提案もなされた．「シンポジウム4．日本から世界への医学教育国際協力の方略」では，ドミニカ共和国，アフガニスタン等での取り組みが発表され，文部科学省，JICA（国際協力機構）の期待も示された．全体として，医師が卒後どのような活躍の場を見出していくかに関し，将来を見据えた形の内容でまとまっていたと思われた．

ワークショップ：学会両日にわたり，7つのトピックスに関連して実施された．事前の参加申し込み者が少なく心配されたが，当日参加でいずれもほぼ定員いっぱいとなる盛況であった．

一般演題：オンラインで登録され，山上会館と教育研究棟の3会場で，口演137題，ポスター69題の，計206題が発表された．演者・座長・フロアの間で活発な議論が展開された．幅広い分野にわたったが，セッション別に多いものをみると，卒後研修関連が35題，評価とフィードバックが35題と，2年目に入った新臨床研修制度や，OSCE・共用試験などの，最近の大きな変革の潮流を反映するものであった．大学以外からの発表が約2割を占め，医学教育に対する取り組みの底の広がりを感じさせた．

懇親会：評議員懇親会は7月28日山上会館地下食堂で開催され，多くの方が出席された．学会理事の改選など重要議題の多い評議員会と永井東大病院長の熱気ある講演（「東大病院の改革」）に引き続き懇親会となったため，大会前日にもかかわらず大変にぎやかなものとなった．大会懇親会は大会初日の夕刻，山上会館1階談話室で開かれた．大滝助教授の司会の下，加我大会長，齋藤学会長のご挨拶の後，尾島岐阜大名誉教授の乾杯のご発声を賜り，その後は楽しい歓談あり，北海道大学中村先生の歌（「脳神経の歌」など）ありの楽しいものになった．最後は次期大会長吉田修奈良県立医科大学長の中締めのご挨拶とスタッフの紹介がありお開きとなった．